様式④

教員活動状況報告書

提出日：令和６年３月９日
所　属：生命・環境科学部 環境科学科
氏　名：大倉健宏　　職位：教授
役　職：

Ⅰ　ティーチング・ポートフォリオ

１．教育の責任（教育活動の範囲）

シラバスに記した内容について、学生の理解を前提として、教授することに責任を負っている。社会学概論以外はいずれも社会調査の方法と実践についての科目である。この点では社会調査士養成について責任をもって担当している。受講した学生が将来質問紙による社会調査を行う際に必要な知識を身につけることについて責任を有している。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
社会調査入門	環境科学科	選択	1	17
社会調査実習Ⅰ	環境科学科	選択	3	4
社会学概論	食品学科・環境学科	選択	1	90
社会調査法	環境科学科	選択	1	27
地域コミュニティ論	食品学科・環境学科	選択	2	22
社会調査実習Ⅱ	環境科学科	必修	3	11
社会調査論	動物応用科学科	必修	2	130

２．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

１．教育理念としては学生が、腹にストンと落ちるような、自前の理解を構築することが大切と考えている。社会調査関係の諸テキストをとりあげているが、学生にとって興味の沸くような素材を用いることが大切と考える。環境科学を専攻する学生にとっては、測定機器を用いて分析することが環境科学と考えているかもしれない。環境は市民の意識を対象とするものであるので、社会調査の方法は重要なものであることを教えたいと考えている。アニマルサイエンスを学ぶ学生にとっては、ヒトと動物の関係を考えることはヒトとヒトの関係を学ぶことであると理解してほしい。社会学概論を学ぶフードサイエンスを専攻する学生にとっては、文化やコミュニティの観点でフードサイエンスを考えてほしいと考えている。

３．教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

教育には即効性のある効果と遅効性の効果があると考える。理系志向の学生に社会学てきな視点や社会調査の考え方と実践について教えることは、後者であると考える。麻布大学では社会調査士養成をはじめて 15 年になる。その間 110 名を越える資格取得者を輩出したが、職業生活において資格と知識を活かすことがあると考えて教育を行っている。加えて今年度は専門社会調査士第一号を取得させることができた。

すべてが遅効性では効果を把握することはできない。そこで両者の中間的な位置づけを見出すことを心がけている。それは授業にて扱った内容を学生がイメージ化できることである。このために重要な概念などを説明する時、例示や例えを多用することにしている。多分例えの内容が、世代的にうったえないものなのであろうか、学生に響かないことがある。この点については、時事的な内容を心がけブラッシュアップを怠らないようにしている。

3 年生の社会調査実習Ⅰ・Ⅱでは、社会調査にて得たデータをどんな形あれ学生が卒論に記すことができればと考え、そのように指導しているが、地域社会学研究室学生を除いては、実際に位置づけてはいない。相模原市選挙管理委員会での選挙人名簿からのサンプリングは受講学生にとって貴重な体験となるものと考えている。卒論においてある物質を定量的に扱うとしても、その物質の利用についての意識を聞くことは補助線になりうると思うが、なかなかな困難である。この点については、学生がとりあげる同実習のテーマが、関心あるから調べました式の、小学生の自由研究になってしまっていると考えられる。貴重なデータを多段階で利用することは繰り返し強調したいと思う。

<u>アクティブラーニングについての取組</u>

社会調査実習Ⅰ・Ⅱ、地域コミュニティ論では質問紙調査、聞き取り調査を学生が行う。学生自身が課題を考え、仮説を構築し、質問または質問紙を用意し回答を得て、分析を行っている。

<u>ICT の教育への活用</u>

実習では社会調査クラウドを利用した調査の実施を計画している。指導する卒業論文や研究室プロジェクトではすでに活用している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）（分量の目安：15～24 行（600 字～960 字））

<u>①教育（授業，実習）の創意工夫（A）</u>

理系研究を指向する学生に社会学や社会調査について関心を持つように、これまでも話題の選択に創意を試みている。1 年生科目は選択科目であり、興味関心を持つ学生の割合が増し、創意工夫が響くようになった。

<u>②学生の理解度の把握（B）</u>

期末試験と課題、小テストという方法を用いているが、評価には通じるが理解度の把握といいえるようになった。

③学生の自学自習を促すための工夫（A）
調査を実施する科目では課題が多くなるため、学生が課題に取り組むことが多い。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)　(B)
即レスを求められても困るが、以前は遅いという評価があった。今年度は早くなったと考えている。

⑤双方向授業への工夫（B）
教室での対面方式授業では提出物に対するコメントとしてしか実施できない。

5.学生授業評価（分量の目安：4 ～7 行（160 字～280 字））
①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。
ここ数年は教材の準備負担が軽減し、学生の求める内容に目を向けることができた。また、ほぼ毎回の講義で冒頭にこの科目の意義と目標を口頭で繰り返し確認した。

② ①の結果はどうでしたか。
特に講義科目での成績優秀な学生が増した。反応が遅いというコメントがなくなった。また何のためにこの科目があるのかわからないというコメントがなくなった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。
一部の科目で新しいテキストを使用した。シラバスの修正などを試みたい。

6.学生の学修成果（分量の目安：4 ～7 行（160 字～280 字））
①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。
　課題提出意欲に差が出ている。成績は差が出てしまうことになる。学生の評価の分布について、正規分布が望ましいうということがまことしやかに言われている。これは根拠のない指摘である。ランダムサンプリングされた対象ではないので、学生の諸個性を理解することが必要だと考える。加えて試験と平常点の割合を変更することを検討し 23 年度から 50%・50%に改めた。その結果不合格者は減少した。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
　メールにて学んだことに対する感謝とその他クレームを受け取っている。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）（分量の目安：1～2 行（40 字～80 字））

FD 研修会にはほぼすべて出席している。先約があり参加できなかったものについては動画を視聴した。内容についても理解したが、実践に活かせた内容は限られていた。危機意識が足りないのだと思う。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

担当する科目での授業評価をあげることである。他の講義の平均にたどり着くことが目前の課題である。今年度テキストを刊行した。このテキストをどのように効果的に利用するかを考えたい。さらに諸科目にわたって利用できる社会調査法のテキストを作成することを目指したい。次年度から学科移籍となる。新たに担当する科目について十分な準備を試みたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス、小テスト，レポート課題，試験問題，教材、TP チャート、授業評価データ，授業に関するコメント

●FD 研修事後課題（ピアレビューによるブラッシュアップ）の実施　㊟　該当を○で囲む

●下線部以外は今回新規追加した事項を示す。